

震宝館だより

題字・畚野光義師

震宝館だより 第112号

平成26年10月3日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山3006
公益財団法人高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話 0736-56-2029
URL <http://www.reihokan.or.jp>



修理が終了した重文執金剛神立像「高野山の名宝」展 東京・サントリー美術館（平成26年10月11日～12月7日）、
大阪・あへのハルカス美術館（平成27年1月23日～3月8日）にて展示 画像提供：奈良国立博物館（撮影：佐々木香輔）

利用案内

■開館時間	5月1日～10月31日 8時30分～17時30分 11月1日～4月30日 8時30分～17時00分
■休館日	年末年始のみ
■拝観料	大人 600円 高・大学生 350円 小・中学生 250円 高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。
■専用駐車場あり	

秋期企画展

「国を護る神仏」

平成26年10月11日（土）～
平成27年1月12日（月・祝）

第112号 目次

秋期企画展のご案内	2～3
収蔵品の紹介86	4
高野山の古建築第十六回	5
高野山の考古学（四）	6～7
考古学から高野山の伽藍	
「中門」を考える（その三）	8～9
高野山の文書（二）	10
高野山霊宝館からのご案内	11
霊宝館の庭園	12

毎月21日（弘法大師の日）ご来館の方にプレゼントあり！ ホームページ割引券もご利用ください

平成26年度 秋期企画展

「国を護る神仏」

期間 平成26年10月11日(土)～平成27年1月12日(月)・祝

前期…平成26年10月11日(土)～11月24日(月)・祝
後期…平成26年11月26日(水)～平成27年1月12日(月)・祝

年末年始

(平成26年12月28日(日)～平成27年1月4日(日)) 休館



重文 無畏十力吼菩薩像 普賢院

高野山を開いた弘法大師空海は、鎮護国家の思想をもって世に真言宗を広めました。

鎮護国家とは仏教の教えをもって国を護るという考え方です。空海は弘仁十四年(八二三)に嵯峨天皇から国家を鎮護する寺として東寺(教王護国寺)を下賜されました。また、空海は承和元年(八三四)に仁明天皇に奉じて、宮中真言院にて承和二年(八三五)正月八日から十四日まで国家安泰、玉体安穩などをいのるため後七日の御修法を営みました。高野山でも鎮護国家の法会が営まれていた記録が残っており、また関係する文化財も多数現存しています。そこで、秋期企画展では「国を護る神仏」と題して、国家の安泰を祈る法会で祀られた仏様や護国の経典、国を護るために戦いに赴いたとされる神仏の絵画・彫刻を中心に鎮護国家に関わる文化財を多数展示いたします。



国宝 紺紙金銀字一切經 金剛峯寺



大元帥明王像 金剛峯寺



立花宗茂像 大円院



重文 銅五鈷鈴 正智院

主な出陳品

彫刻

- 重文 兜跋毘沙門天立像
- 波切不動尊像(複製)
- 親王院
- 靈宝館

工藝

- 重文 銅五鈷鈴
- 九鈷鈴(伝神功皇后所持)
- 浴油多羅
- 正智院
- 有志八幡講
- 金剛峯寺

絵画

- 重文 無畏十力吼菩薩像(五大力菩薩像のうち)
- 普賢院【前期】
- 重文 無量力吼菩薩像(五大力菩薩像のうち)
- 普賢院【後期】

- 兜跋毘沙門天像
- 五大力菩薩像
- 蒙古退治四社明神像
- 普賢院
- 竜光院
- 竜光院
- 西禅院

(4頁「収蔵品の紹介」参照)

- 大元帥明王像
- 金剛峯寺
- 仁王経大曼荼羅
- 金剛峯寺

書跡

- 国宝 紫紙金字最勝明王経
- 金剛峯寺【前期】
- 国宝 紺紙金銀字一切経
- 金剛峯寺【前期】
- (仁王般若経 見返し絵五大力菩薩像)
- 大元帥御修法諸次第
- 金剛峯寺
- 後醍醐天皇綸旨(延元二年)
- 金剛峯寺

収蔵品の紹介 86

蒙古退治四社明神像

一幅 絹本着色 縦84・3cm 横39・8cm
室町時代 西禅院蔵



(参考) 四社明神像
金剛峯寺蔵、南北朝時代

四社明神はかつらぎ町天野にある天野社(丹生都比売神社)に祀られる、四柱の神々のことで、高野山の地を守護する丹生明神(画面向かって右上)、狩人の姿で黒・白二匹の犬を連れて弘法大師空海を高野山の地へと導いた高野明神(別名狩場明神、左上)、鎌倉時代、行勝上人(一一三〇〜一二一七年)によって勧請され、共に祀られるようになった気比明神(右下)と厳島明神(左下)を指します。伽藍の御社に祀られているのは丹生明神と高野明神です。

四社明神は普通、(参考)のようにそれぞれ団扇・笏・扨子・琵琶を持ちますが、本図では雲の上に立ち(あるいはしゃがみ)、手に武器を持っていたり、そばに槍を立てている、勇ましい姿で描かれています。このような図像は「蒙古退治四社明神像」あるいは「元寇に赴く四社明神像」とも呼ばれ、鎌倉時代の元寇の際、四社明神が出陣したという、その様子を描いたものです。

江戸時代に編さんされた『高野春秋編年輯録』によると、弘安四年(一二八一)の二度目のモンゴル襲来の際、鎌倉幕府よ

り弓箭(弓矢)・御剣・幣帛(神への捧げ物)などが天野社に献じられ、日本中の神々が出陣の準備をする中、「天野大明神」が第一陣として向かうこととなります。四月二十一日に天野社境内にいた数千羽のカラスが、一つがいを残して全て飛び立ち、同月二十八日には社殿が鳴動し、光を発したことから、明神が出陣したのであると、とされています。同年七月に元軍が大風によって大打撃を受け、撤退したことは皆さんもご存じかと思えます。

本画像には画面上部に四羽のカラスが描かれており、この奇瑞をあらわしています。丹生、高野明神が黒・白の犬を二匹ずつ連れてくるのは、弘法大師を導いた犬を示すと同時に、狛犬をイメージしているのかもしれませんが、同様の図像は他にも高野山や天野などに伝わっており、四社明神が戦いの神としても信仰されていたことがうかがえます。

なお、弘安四年五月に南院本尊の波切不動尊(重文)も筑後国(福岡県)に移され、元軍征伐の修法が行われたことが知られています。

(福形)

連載

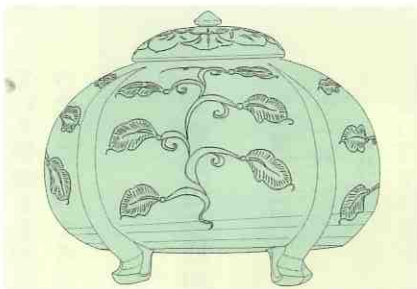
高野山の古建築

第十六回 県指定文化財 真然堂

鳴海 祥博



「真然堂」全景 寛永17年(1640)に建立された、桁行き3間、梁間3間、向拝1間、宝形造、檜皮葺の建物で、透塀に囲まれ静かにたたずんでいる。



「緑袖四足壺」の実測図 地中から発見された舍利容器。類い希な優品で、真然大徳に対する思慕の念をまざまざと思わせる。



「高野山水屏風」に描かれた大伝法院 中央の大きな2階建ての建物が大伝法堂。右上上の多宝塔が「聖霊堂」と称された真然大徳の御廟と思われる。鎌倉時代の様子である。

真然大徳は寛平三年(八九一)に亡くなり、住まいであった「中院」の東に墓所が営まれたと伝えられていました。ところで、現在の総本山金剛峯寺「真然堂」は寛永十七年(一六四〇)に建てられたことが棟札によって明らかになっています。その年は真然

大徳の七五〇回忌の年でした。しかし現在の真然堂が建てられる以前、その場所がどのような状態であったのか、何があつたのかなどは、ほとんど誰も気にとりませんでした。真然大徳の千百年御遠忌を目前にして、昭和六三年(一九八八)から真然堂の大修理が行われました。そして修理に伴って地下調査を行ったところ、なんと、お骨を納めた壺が発見されたのです。それは「緑袖四足壺」という逸品の陶磁器で、真然大徳に対する思慕の念をまざまざと思わせるものでした。真然堂は真然大徳のお墓だったのです。

高野山では、お墓には木や石の「墓標」を建てるだけではなく、そこにお堂を建てて、生前と同じようにお仕えるという思想があつたのではないのでしょうか。中世の文書を見ると「〇〇堂は、△△上人の骨堂(お墓)なり」という記述を目にします。鎌倉時代に建てられた国宝金剛峯寺不動堂は、床下にお骨を納める納骨堂だったので、高野山では常に死者に寄り添い、極楽往生を願って共に生きていた、そんな一面を、この真然堂は伝えているのではないのでしょうか。真然大徳は「伝法会」という法会を始めました。そしてその法会を最も大切に守つたのが覚鑿という平安時代のお坊さんでした。覚鑿は鳥羽上皇の信頼を得て高野山に「大伝法院」というお寺を創建し、そこには「聖霊堂」という多宝塔が建てられ、それが真然大徳の御廟、つまりお墓だと伝えられていました。「大伝法院」はその後、根来寺に移転しましたが、その跡地に現在の金剛峯寺が建てられたのです。真然堂の地下調査の結果、最初に土を盛った墳丘が造られ、後にその上に二度にわたって建物が建てられ、現在の真然堂は三代目の建物であることが明らかとなりました。また風鏝という、主に塔を飾る金物が見つかったことから、ここに「聖霊堂」のあったことも確実なようです。真然大徳はここで一一〇〇年以上高野山の歴史を見守ってきたのです。

納骨信仰の展開②

公益財団法人 元興寺文化財研究所

狭川 真一

今回は、昭和四十年（一九六五）

春の高野山御開創千五十年記念事業の一環で行われた、御廟周辺の整備に伴って発見された納骨に関わる遺構や遺物について整理してみます。御廟周辺の瑞垣等の改修工事は昭和三十八年（一九六三）から始まりました。たぐさんの遺物が工事に伴って出土したという情報を得た、

当時高野山高校教諭だった楯英雄氏と学生だった愛甲昇寛氏などの努力によって、記録され、採集されたものが基礎となっています。残念ながら、写真はわずかな枚数しか残っていませんが、たいへん貴重な記録と言えます。

この頃に発見された遺物や遺構のことは、のちに専門家の協力も得て、『高野山奥之院の地寶』（以下『地寶』という）という立派な本になって上梓され、今日でも高野山奥之院を考えるうえで重要な情報源となっています。

ます。

ここではその『地寶』に掲載されている情報を整理して、御廟周辺への納骨について考えてみたいと思います。

御廟周辺の様相

『地寶』に掲載されている注目すべき一枚の写真があります（写真1）。これは白磁や青磁の壺類、金属製の筒型容器がまとまって出土している様子です。土器がきれいに洗ってあるので、ちよつと手入れしてから写したと思われるが、発見時の生々しい様子をよく伝えています。この写真から大きささまざまな容器にお骨を納め、とくに整頓することなく次々と置かれていたことがわかります。この写真に対する『地寶』の解釈は、山石が多く混在していることから当初は簡単な石室があった



写真1 白磁、青磁、金属製容器などの出土状況

思って、楯先生や愛甲先生に連絡をとりましたところ、愛甲先生から遺物の写真とともに数枚の現場の写真が送られてきました（写真2・3）。写真2は写真1の角度違いですが、『地寶』の推定を彷彿とさせます。さらに詳しく見ると、年代の新しい容器に重なって古い容器が乗っているようにも見えるので、近くに埋納していたものを後の時代に整理して埋納したものと考えられます。写真3は明らかに石室状のものの中にいくつかの納骨器を納めているのがわかります。この詳細は不明ですが、御廟の前（御所の芝付近）に多数の納骨が行われたことや、納骨専用の施

が、次の納骨の時に破壊されたのではないかと想定しています。そこでもっと他に写真はないかと

ります。この詳細は不明ですが、御廟の前（御所の芝付近）に多数の納骨が行われたことや、納骨専用の施

設が作られていたことは間違いないでしょう。

出土遺物を眺めてみますと、中国製の白磁四耳壺や水注、青白磁無頸壺、青磁の蓋付小壺、陶器の壺や四耳壺、古瀬戸の四耳壺、それに金属製の経筒風のものや金銅製の仏像、小型の金属製筒形容器など、多彩な納骨容器が発見されています。これらは、概ね一二世紀後半（平安時代後期）から一四世紀前半頃（鎌倉時代後期）の製品ですので、その頃に埋納されたものとみて問題ないで



写真2 納骨器出土状況

しよう。百年以上にわたり、この付近に次々と納骨されていた姿が浮かび上がります。

御廟の近くの様相

これに対して御廟の近くはどうなっていたのでしょうか。植樹の時に発見され、観察された結果が『地寶』に掲載されています。この付近では御所の芝とは異なり、穴などにまとめて納められていたとは報告されていません。あまり詳しいこ



写真3 石室風遺構と納骨器

があります（写真4）。宝篋印塔とは塔内に宝篋印陀羅尼を納める塔

とは分かりませんが、どうやら第一回で詳しくご紹介した法葉尼による埋納が行われたときと同じく、明確な施設を伴わずに散在的に埋納されていたようです。

その中に御

とされているもので、階段状の笠とその四隅に立つ隅飾が特徴的です。宝篋印陀羅尼は舍利の功德を説いたもので、まさに舍利塔としても機能していたと考えられます。その塔内にお骨を納めて埋納していたのです。塔の基礎部分には銘文があり、弘安十年（一二八七）六月二十二日に亡くなった南保又二郎という人物の遺骨が納められていると記されています。この人物に関する記録は残っていないので、残念ながら詳しい出自はわかりません。

御所の芝付近では専用の納骨施設を作って、多数の方のお骨を納められるようにしていましたが、御廟に近いところでは様子が大きく異なり、ごく限られた人のみが納骨を許されたと思われれます。そうすると、南保又二郎という人物はかなり高貴な身分の人だったと考えられます。



写真4 金銅製宝篋印塔

考古学から高野山の伽藍「中門」を考える (その三)

中門安置の二天像と修行僧



多聞天 (毘沙門天)



持国天



中門南西隅で確認された多聞天の基礎遺構



中門南東隅で確認された持国天の基礎遺構

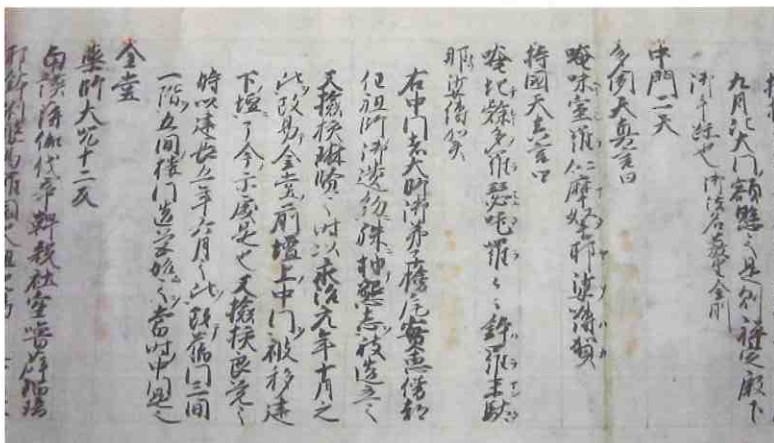
伽藍中門には、四期の建立時（永治元年（一一四一）から七期の焼失時（天保十四年（一八四三））まで、七〇二年間にわたって、伽藍を守護する多聞天（「毘沙門天」ともいいます。中門の時期については、前号霊宝館だより一一〇号六頁の表をご参照ください。）と持国天の二天像が祀られていました。七期中門に祀られていたとされる二天像（図1、2）は、天保十四年の七期中門が焼失した際に持ち出され、その後長らく西塔で、そして平成十一年から同二十四年までは大塔で安置されていました。

二天像については、発掘調査の事前に行った古絵図や文献などの史料調査の結果、中門の南西隅に多聞天、南東隅に持国天がそれぞれ祀られていたことがわかりました。

この成果をもとに、七期中門跡の礎石群の南西隅と南東隅において、発掘調査区を設け掘削を進めた結果、それぞれの場所において石組遺構を確認しました。



修行僧の伽藍巡礼風景（平成23年6月撮影。現在、中門跡には8期中門が再建中）



「明恵上人巡礼次第」(鎌倉時代)

そこで、石組遺構に配置された石の範囲と、現存する多聞天、持国天の脚部足裏の規模を照合した結果、規模が一致し、これらの遺構が二天像を安置するための基礎遺構であることが確認しました。

次に、中門の二天像をめぐる修行僧について、お話を紹介します。

古来より、高野山で正式な僧侶である「阿闍梨」になるためには、修行僧は「四度加行」という厳しい修行を終えなければなりません。

修行期間中は寺院の修行道場に籠り、俗世間との関わりを断ち、そして「奥之院」と「伽藍」の両壇の諸堂塔を巡礼し、ひたすら神仏を拝みます。

巡礼方法として、諸堂塔を巡る参拜順路や参拜位置（立つ場所）、どの方向を向き、どの経典や何の真言を、何回唱えらるといったことが事細かに定められています。

この巡礼に関する史料には、『明恵上人金剛峯寺巡礼次第』（鎌倉時

代。以下「次第」といいます。）があり、現在と同じように当時も巡礼が行われていたことがわかります。そもそも高野山の伽藍は、修行道場を目的として建立されていることから、この史料より以前の時期から、このような伝統的な巡礼方法が行われてきたに違いありません。

また、『次第』には、唱える経典、真言などの記載内容以外に、師僧から弟子にしか伝えられない「口伝」が伴い、その内容は巡礼するにあたっての諸注意などとなつていきます。

巡礼場所の一つに、伽藍金堂南側の場所があります。この場所は、『次第』と「口伝」に従い、金堂の南正面から南方に向かい真言を唱えます。その際、まず「おん べい しらまんだや そわか」、次に「おん じれい たらしゆたららら はらばだなう そわか」と、各真言を七遍唱えます。前者が「多聞天」、後者が「持国天」で、

中門に祀られていた二天像の真言です。

一般的に、「巡礼」というと、実際に目の前にある堂塔の建物や神仏の像に向かって祈ります。しかし、天保十四年に中門が焼失して以来、今日までの約百七十年間もの間、中門の建物はなく、また二天像が中門に存在しなくても、修行僧の目の前にはあたかも中門が建ち、そして二天像が祀られているものとして、観想し祈り続けているのです。

考古学では、人間が生活する上において使用していた「建物」や「道具」などの物質は、その形や機能が失われると、前者は「遺構」、後者は「遺物」、そして、これらで構成されるのが「遺跡」と呼ばれます。

しかし、中門跡の場合、建物や二天像の存在が無いにも関わらず、現在も巡礼が行われていることから、高野山は「生きていく遺跡」、そして「これからも生き続ける遺跡」であり、極めて希有な存在の遺跡であると言えます。

二天像は現在、修理を行っており、修理後は平成二十七年に執行される高野山開創千二百年記念大法会で落慶される八期中門に安置されお披露目されます。

(鳥羽)

高野山の文書 (二)

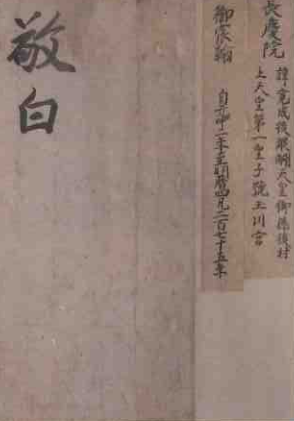
「長慶院御願文」と長慶天皇即位について

高野山に伝わる国宝『宝簡集』の中に、「長慶院御願文」と呼ばれる文書があります。南北朝時代の元中二年（一三八五）に南朝の長慶天皇（諱は寛成）が天野社（かつらぎ町）に納めた願文です。現存唯一の長慶天皇御宸筆で、その内容は「今

度の対決が私の願った通りになったら、特に誠意をもってお礼にお参りに伺います。太上天皇寛成。」というものです。この対決が北朝との戦いを示すのか、不仲だった弟の後亀山天皇との確執を示すのかは不明です。しかし、長慶天皇が抗戦派で、後亀山天皇が和睦派であったことを考えると、どちらの意味でも長慶天皇の強い北朝への徹底抗戦の意志が窺える史料です。

族の系図。一四二六年完成。）、「長慶院御願文」などが根拠でした。両史料とも「寛成」が上皇（太上天皇の略）であったことを示しています。上皇とは天皇の譲位後の尊号です。で、天皇即位の有力な根拠とされました。

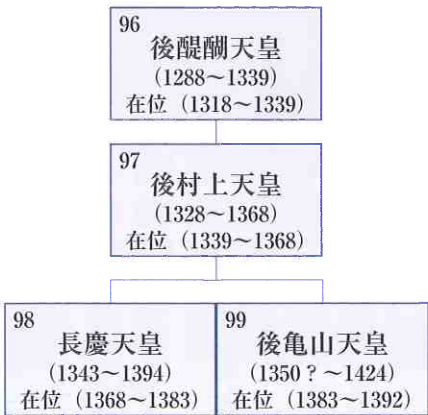
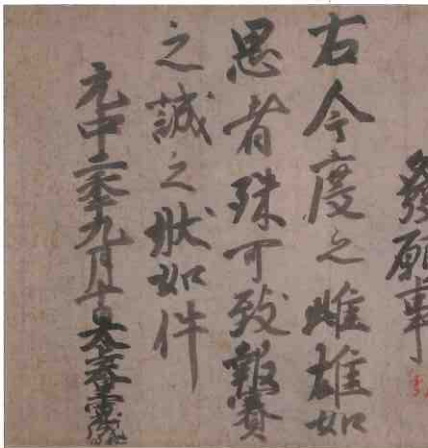
①説は、後亀山天皇の生年が不明瞭であることと、皇太子が即位せず上皇となった前例をこの件にも当てはめた説でした。②説は、「寛成」は「ひろなり」と読み、後亀山天皇の諱「熙成」と同音であるため、「寛成」と「熙成」は同じ後亀山天皇のことで、即位後に「熙」から「寛」に漢字を変更したという説でした。その他にも様々な視点で議論されましたが、大正時代に八代国治氏らが長慶天皇の即位を論証し、大正十五年（一九二六）によりやく歴代天皇の一員に加えられました。特に、②説への反証には「長慶院御願文」が使われました。後亀山天皇御宸筆との比較により、筆跡の違いが指摘され、長慶天皇と後亀山天皇が別人である根拠の一つになりました。



長慶天皇は、関係史料が少ないため、天皇に即位したかどうか議論されてきた幻の天皇でした。即位説は、『本朝皇胤紹運録』（天皇・皇

一方、非即位説は、南朝の准勅撰和歌集『新葉和歌集』を中心に南朝の史料を根拠としていました。『新葉和歌集』は長慶天皇の代の和歌集ですが、論争当時は後亀山天皇の代のもので誤認されていました。その『新葉和歌集』の序文に南朝が「三代」であると書いてあります。南朝の天皇は後醍醐、後村上、長慶、後亀山と続きます。後亀山天皇の代で「三代」だとすれば、その前の天皇は二人です。長慶天皇は前述の理由で、この「三代」の天皇から外されました。さらに、即位説に反論するため左の二説が挙げられました。

このように、「長慶院御願文」は長慶天皇の即位だけでなく、その存在の有無も明らかにした非常に重要な史料であるといえます。



【系図】南朝天皇の系図

①長慶天皇は後亀山天皇の皇太子であり、即位せずに上皇となった。
②長慶天皇は後亀山天皇と同一

(主な参考文献)

- 八代国治『長慶天皇御即位の研究』明治書院 一九二七年 ※主要論文初出は一九一六年
- 森茂暁『南朝全史 大覚寺統から後南朝へ』講談社選書メチエ 二〇〇五年

(研谷)

高野山霊宝館からのご案内

◎第9回高野山霊宝館もみじ祭のお知らせ

○フォトコンテスト

テーマ「高野山の四季」

応募期間

平成26年11月1日(土)～30日(日)

当日消印有効

応募要領

① A4版(21×29・7cm)写真プリント紙にプリントされた作品。

② 撮影場所とその写真に関するコメントを二百字程度で添えてください。



昨年の応募作品

③ 作品の裏側に天地がわかるように上端に「上」と記載

し、住所、氏名を明記してください。(電話番号、年齢は任意)

④ 応募者一名につき、一点の応募。

⑤ 応募写真の著作権は作者に帰属しますが、当コンテスト及びその他高野山内での展示、広報のポスター、チラシ等への無償使用権が当館に帰属しますので、ご了承ください。

⑥ 人物を被写体として撮影し、個人が特定される場合は、必ずご本人に当コンテスト応募の旨の承諾をいただいでください。

⑦ 応募写真は、応募者自身が撮影したものに限りません。

⑧ 過去に写真コンテスト等に応募した作品、またその他コンテストとの二重応募はご遠慮ください。

⑨ 応募写真は返却できませんので、ご了承ください。

フォトコンテスト応募先・お問い合わせ先

高野山霊宝館「フォトコンテスト」係 電話0736・56・2029
〒648-0211 和歌山県伊都郡高野町高野山306

◎特別公開 お知らせ

◎重要文化財・徳川家霊台内部を公開

〔日時〕 11月1日(土)～9日(日)

午前9時～午後4時30分

〔場所〕 徳川家霊台

(家康霊屋・秀忠霊屋)

〔拝観料〕 200円(通常拝観料)



昨年の公開風景

◎特別公開 報告

◎国宝・不動堂を公開



公開風景

通常、不動堂は非公開ですが、昨年内部の特別公開をいたしましたところ、好評につき、本年8月27日(水)から29日(金)にかけての3日間、特別公開いたしました。

公開期間中、1300名もの見学者がお越し下さり、来場者は普段見ることのない建物内部の細部を興味深く見入っておられました。



家康霊屋内部
厨子上部の組物細部



家康霊屋内部の壁画

◎関西文化の日

11月10日(月)は「関西文化の日」に協賛し、霊宝館無料拝観日となっております。

お問い合わせ先 **高野山霊宝館** TEL 0736-56-2029(代)

霊宝館の庭園

クリ・栗・しばぐり・柴栗

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭



穂状花序の基部に雌花が



笑栗



クリの幹と樹皮

クリはブナ科・クリ属の落葉広葉高木です。クリ属の自生種は地球上で十種、わが国ではこのクリ一種で、方言名・別称は、しばぐり（柴栗・しばぐりと呼んでいます。高野山でも、柴は山野の小雑木、栗は「りつ」で成木や大木の幹材が硬いことによる用字だそうです。耐久性・耐湿性も強く、家屋の腐蝕しやすい部分材

などに、以前は鉄道の枕木や土木工事用の杭としても用いられ、縄文時代の遺跡からは、この材の柱木が出土しているそうです。古書では、久利と表記されていることが多いようです。属の学名・カスターネアはスペイン語の「栗の実」の意、小打楽器のカスターネットの語源ともなっています。高野山塊の大部分が植物の垂直分

布でいうクリ帯であり、クリは萌芽力の強い陽樹、道端の二次林などでも容易に見（観）ることが出来る樹種の一つですが、大木や老木は少なくなっています。若葉が深緑色となる梅雨の頃に穂状花序の白い雄花が目立つようになり、強い匂いを発散します。少しおくれ、雄花花序の基部に雌花が。山頂部での今年の雄花の盛りは七月八日前後、七月十五日には、小さな金平糖状の総苞をもった雌花が視られました。総苞は表面に刺が密生

し夏の間には球形の毬栗となります。秋には毬が四辺に裂けて、二〜三個の栗の実（堅果）が現れます。これを笑栗、実だけか、裂けた毬ごと地上に落ちてくるものを落栗といいますが、ヒトは、古い時代から、これを拾い、今日まで食用（食糧）としてきました。そのことは、縄文時代の遺跡の遺物としてあげられているものや「日本書記」、「万葉集」などからも窺い知ることが出来ます。先輩に連れられ、友達を誘って、高野山の山野に入って遊び、クリの実を拾い集め、ゆで栗や栗飯にしてもらい、囲炉裏で焼いて食べたなどという実体験のある人達は、おおかたが高齢者の仲間入りをされているのでは。クリは品種栗と比べて実は小さいが、甘味・風味は抜群です。

高野山では、現在も、品種栗・栗を食材とした料理や、お菓子は受け継がれ作り続けられています。今年の笑栗や落栗の見（観）られるのも、もう直ぐです。